「ひかりごけ」論

清原万里

1

武田泰淳の「ひかりごけ」は、〈私〉の語りによる紀行文風の前半部と、〈私〉の創作した戯曲という形式をとった後半部の、二つの部分からなっている。このうち、後半部については、後にふれるとして、まずは、前半部から見ていきたい。

「ひかりごけ」前半では、作者の分身であるらしく思われる〈私〉が、羅臼を訪れて、ひかりごけ見学の帰りに人肉食事件の話を聞き、その話を二ヵ幕の戯曲として作品化するまでの経緯が、〈私〉自身の口を通して語られる。つまり、「ひかりごけ」前半は、作中作として設定された後半戯曲部分を、〈私〉が書くにいたった事情の説明として、ひとまずは位置づけられるのである。したがって、後半戯曲部分の理解には、前半部の理解は欠かすことができない。特に、事実関係の説明をはなれて、〈私〉が自分自身の考えを述べた部分は、戯曲創作にあたってのモチーフを示しているものとして、見過ごすわけにはいかない。

具体的には、後に大岡昇平が〈誹謗〉であると反論した(1)、「野火」批判を含む前半部終わりの一節がそれである。本当に〈誹謗〉であるかどうかは別にして(2)、〈私〉が「野火」の主人公を〈文明人ぶっている〉と批判するにいたった過程のなかに、後半戯曲部分の、ひいては「ひかりごけ」全体の重要なモチーフが示されているように思われるのである。

次にその一部分を引用してみたい。

しかるにもし、人肉喰いとなれば、たとえどんな条件の下で発生しようと、身ぶるいがするほど嫌悪の念をもよおす。何という未開野蕃な、何という乱暴な、神を怖れぬ行為であるか、自分はそんな行為とは無関係だし、とても想像さえ出来ない、と考えます。まるで殺人は、罪としては一般なみであり高級であり、人肉喰いはごく特殊で下等であると、相場が決まっているかのようです。

殺人は「文明人」も行い得るが、人肉喰いは「文明人」の体面にかかわる。わが民族、わが人種は殺人こそすれ、人肉喰いはやらないと主張するだけで、神の恵みを享けるに足る優秀民族、先進人種

と錯覚してはばかりません。

「野火」の主人公が、「俺は殺したが食べなかった」などと反省して、文明人ぶっているのは、明かにこの種の錯覚のあらわれでありましょう。

この引用からは、「野火」の主人公が〈文明人ぶっている〉という発言は、〈殺人は「文明人」も行い得るが、人肉喰いは「文明人」の体面にかかわる〉という言葉をうけてのものであることがわかる。つまり、吉田凞生氏の指摘した[3]ように、〈殺したが食べなかった〉という「野火」の主人公の反省命題そのものを、〈私〉は批判しているのである。

では、なぜ殺人と人肉食に優劣をつけることが、問題になるのか。言うまでもなく、それは、〈殺したが食べなかった〉という反省命題が、〈文明人〉の〈錯覚〉に基づくものだからである。引用に続く部分で、〈私〉は、我々が人肉食に〈嫌悪の念をもよおす〉のは単なる慣れの問題にすぎないという主旨の発言をしている。とすれば、人肉食を殺人より重い罪とみなす〈文明人〉の倫理的判断は、〈錯覚〉に他ならないのであり、〈殺したが食べなかった〉という反省命題は、成立しえないことになる。

つまり、〈私〉はここで、〈文明人〉の〈錯覚〉を告発しようとしているのであるが、問題は、その先にある。なぜ〈私〉は、そのような告発をしなければならなかったのであろうか。

ここで注目したいのは、〈文明人〉とほぼ重なりあうかたちで、〈優秀民族〉・〈先進人種〉という言葉が使われている一方で、〈文明人〉に対立するかたちで、〈未開野蕃〉という言葉が使われていることである。つまり、〈文明人〉という語は、〈未開野蕃〉と対になったものとして置かれており、単独で使われているのではないのである。したがって、〈文明人〉の〈錯覚〉というのも、単に、人肉食を行わないことをもって自らを〈文明人〉と考えるというだけのことではなくて、人肉食を行うものを〈未開野蕃〉と決めつけるような意識を伴ったものとして捉えられなければなるまい。

結局、ここで〈私〉が告発しているのは、人肉食をより劣った罪とするような倫理的判断に支えられた、〈文明人〉対〈未開野蕃〉という対立図式なのである。言いかえれば、人肉食を行うものを〈未開野蕃〉と決めつけ、自分たちよりも劣ったものとみなすような、自称〈文明人〉の判断を、〈私〉は、〈錯覚〉だと告発しているのである。

さらに言えば、〈私〉が〈未開野蕃〉というとき、そこに想定されているのは、アイヌ民族である。そのことは、人肉食事件を聞かされた〈私〉がまっ先に思い浮かべた、〈M氏〉のエピソードから確かめられる。

ある民族のある一員が（或は数人または数十人が）、かつて人肉を食べたという発表が、どうしてそれほどM氏を激怒させたのか、その時の私には、うまく理解できませんでした。それよりもむしろ「アイヌであることを隠して、暮さなくちゃならない、アイヌの知識人もいるんですからね」と語ったさいの、このアイヌ出身の最高知識人の、軽蔑と孤独と悲痛の入れまじった、息苦しい表情だけが胸に灼きつけられたのです。もしも、M氏がペキン岬の惨劇を知悉

していたら、「戦意昂揚」した「聖代の民草」のなかに、アイヌ族ではなくて、まごうかたなき、和人であり、シャモである、純粋（？）の日本人の中にも、人肉を食べた男がいるではないかと、正面から反撃できるはずだったのです。

〈M氏〉が激怒した発表というのは、かつてアイヌの一部族が人肉食を行ったという内容のものであった。[4] その発表に激怒した〈M氏〉の心情は、〈アイヌであることを隠して、暮さなくちゃならない、アイヌの知識人もいるんですからね〉という言葉に要約されている。〈M氏〉が〈アイヌであることを隠して、暮さなくちゃならない〉のは、アイヌが〈未開野蕃〉な民族とみなされ、〈M氏〉自身、〈未開野蕃〉扱いされることの苦しみを、いやというほど味わってきたからだと考えられる。その〈M氏〉が発表に激怒したのは、人肉食が〈未開野蕃〉とされる〈文明〉社会において、アイヌが人肉食を行ったと語ることは、アイヌが〈未開野蕃〉であると語ることになりかねないからである。〈私〉が指摘しているように、アイヌ研究者が、〈人道主義的〉な人々であり、発表者に悪意はなかったとしても、むしろそのような人物の発表であっただけに、〈M氏〉の怒りは激しかったのではないだろうか。

真相は別にして、少くとも〈私〉が、〈M氏〉の怒りをそのように理解し、〈M氏〉に共感していることは、〈聖代の民草〉とか〈純粋（？）の日本人〉とかいった言葉が、ことさらに用いられていることでわかるのである。

さきにあげた〈文明人〉の〈錯覚〉の問題に、以上のようなことを重ねあわせることによって、「ひかりごけ」の重要なモチーフが浮かびあがってくる。〈私〉が後半の戯曲部分で標的にしているのは、アイヌ民族を〈未開野蕃〉とするような〈文明人〉の〈錯覚〉、つまりは〈文明〉対〈未開野蛮〉という対立図式と、それを支える倫理体系なのである。そして、作品前半が、ほぼ武田自身の体験的事実に即していると考えられることからみて、[5] それは、「ひかりごけ」全体において、武田が標的にしているものだと言ってよいだろう。

もちろんそれは、あくまでも、モチーフの一つである。しかし、人肉食事件の話を聞かされた〈私〉がまっ先に思い出したのが、〈M氏〉の話だったことでわかるように、アイヌを〈未開野蕃〉としてきた〈文明人〉としての和人の〈錯覚〉に対する告発が介在することによって、はじめて、北の一漁村の郷土史に埋もれていた事件が、一つの文学表現へと結晶できたのであることは間違いないだろう。[6]

戯曲第一幕のマッカウス洞窟と、第二幕の法廷は、ともに、〈文明人〉の〈錯覚〉を照射する、ある種の文明批判の場として、まず存在したのである。

2

以上述べてきたように、「ひかりごけ」のモチーフに〈文明〉を批判するということがあったのだとすれば、それは、作品後半で、どのように実現されているのであろうか。

〈文明〉批判が、作品後半で意図されていることは、例えば、次のような台詞にもあらわれている。

船長　おめえ、華々しく戦死して金鵄勲章さ、もらいたくはねえのか。おめえ、俺たち船員の任務を忘れたんではねえべな。俺たちが、どれくれえ日本陸軍に必要な人間だか、そんこと忘れたんでは、ねえべな。

西川　忘れるもんでねえさ。

船長　このままでいれば、どうでも俺たちは死ぬだぞ。今の場合、ただおっ死ぬぐれえ、やさしいこたねえ。ただ腹すかして死ぬんなら、任務も責任もあったもんでねえわさ。もう一度船さ乗って、御国のためにつくすこともしねえで、気い弱くして、飢え死する。そんなこた、なまけ者でも卑怯者でも、できるこったからな。

ここでは、戦時下の日本を支配していた忠君愛国の論理、すなわち、〈優秀民族〉たる〈聖代の民草〉の論理が、人肉食という〈未開野蕃〉な行為に結びつけられている。しかも、それが説得力を持ちうるかどうかは別にして、船長の論法は、少くとも論理的には一貫している。〈御国のため〉という目的が、全てに優先するという思想を極限までおしすすめている点では、あるいは、この論理は忠君愛国を最も尖鋭に表現したものだと言えるかもしれない。

大切なのは、忠君愛国の論理の正当性を信じている西川に対して、そのようなものを最も信じていそうにない船長が、この論理をおしつけたということである。つまり、この論理は、パロディーとして、〈優秀民族〉の論理を無効にするために置かれているのであり、そこには、〈文明人〉の〈錯覚〉をつき崩そうという作者武田の意図があらわれていると考えることができる。

もっとも、このようなかたちでの〈文明〉批判は、それ単独では、さしたる効力は持ちえない。船長の論理は、〈文明〉など全く意味を持たない場所で使われてこそ、はじめて有効なパロディーとなりうるのであり、重要なのは、パロディーを成立させている文脈なのだ。「ひかりごけ」後半は、その作品空間そのものが、〈文明〉の論理を受けつけない一つの反世界であり、そこで展開される劇は、必然的に〈文明〉の無力さを証拠だててしまうのである。特に第一幕のマッカウス洞窟は、そのような空間として設定されていると言ってよい。

このことは、五助・八蔵・西川という三人の船員に、まず、端的にあらわれている。

五助は、最初に死んで喰われてしまう男であるが、その死を予感したとき、八蔵にむかって、〈おめえたちに喰われたくねえ〉から死にたくないと語っている。つまり五助は、自分が死んだとき、残された三人がその肉を食べることを制止するほどの力を、倫理すなわち〈文明〉が持ちあわせているとは、思っていない。むしろ、そんなものはあっさりと捨て去られてしまうであろうことを信じているのである。

では、〈喰われたくねえ〉と言われた八蔵はどうであったか。彼は、五助に〈喰わねえ〉ことを約束し、ついにその肉を口にしようとはしなかった。しかし、それはあくまでも、〈五助が死ぬまえに、約束した〉からで、八蔵は、人肉食そのものは否定していない。逆に、船長に〈ほんとに、あれを喰いたくはねえのか〉（傍点ママ）と問われて、〈おら、五助さ喰いたくはねえ。うんだが、あの肉はときどき喰いたくなるだ〉（傍点ママ）と、自分にも人肉食に対する欲求があることを認めることによって、八蔵は、人肉食を容認してしまっているのである。

八蔵が、庶民的で、自己の想念を正直に語るような人物であったのに対し、西川は、インテリタイプの、観念が先に立つ人物として描かれている。彼は、人肉を食べながらも、人肉食を否定する倫理的判断を捨て去ることができなかった。西川を狂気の一歩手前までおいやったという点では、少くとも〈文明〉は、それだけの力を持っていたわけである。しかし、その〈文明〉の力も、西川が人肉食を実行することは、とめられなかったのである。

このように、三人の船員は、それぞれ様相を異にしながらも、ついに三人ともに、〈文明人〉でありつづけることができなかった。つまり、マッカウス洞窟という空間のなかでは、〈文明〉は、完全にはその力を保ちえないのである。

しかし、「ひかりごけ」での〈文明〉批判が、〈文明〉対〈未開野蕃〉という対立図式を標的にしてのものであるとすると、三人の船員のありかたは、〈文明〉批判としてはなお不十分であると言わねばならない。彼らは、〈文明〉の側に踏みとどまることができなかったのではあるが、一方で、〈文明〉とのつながりを断ち切ってもいない。つまり彼らは、〈文明〉の無力さを示す存在ではあるが、人肉食を罪とする倫理的な判断を空無化するほどの存在ではない。したがって、第二幕での検事の演説にあるような〈人間的反省、人間的苦悩〉を三人が示したという理解や、あるいはまた、人間は誰でも人肉食を行いうるような非人間的な側面を持っているとか、誰にでも〈未開野蕃〉な部分があるとかいった安直な理解の成立する余地が、残されている。

このような三人の船員のありかたに比較的近い存在として、「野火」の主人公・田村一等兵をあげることができる。彼は、〈人間がその飢えの果てに、互いに喰い合うのが必然である〉(「野火」)のではないかという認識に直面した時、〈私が吐き怒ることができるとすれば、私はもう人間ではない。天使である。〉(同前)と、自己を神の代理の位置に置こうとする。つまり、田村一等兵は、ついに人肉食を倫理的な視点からしか見られなかったのである。(7)

「ひかりごけ」の前半における、〈文明人ぶっている〉という「野火」批判は、そのような倫理的判断を指してのものだと考えられる。〈文明〉対〈未開野蕃〉という図式を空無化するためには、殺人に対しては〈吐き怒る〉ことがなく、人肉食に対しては〈吐き怒る〉ような、「野火」の田村一等兵の倫理的判断をも、空無化しなければならないのである。

後半戯曲部分の主人公である船長は、その意味で、田村一等兵を超える存在と言ってよい。武田は、船長を通して、人肉食とは何であるかを、根源へむかって問いつめることによって、〈人間がその飢えの果てに、互いに喰い合うのが必然である〉という田村一等兵の直面した認識の、さらに先を見通そうとしている。つまり、「ひかりごけ」での〈文明〉批判は、人間の存在の根源への、実存的とも言える問いかけという、独特の経路を通して行われるのである。

いささか論がさきばしったが、続いて、船長について具体的に考えてみたい。

3

松原新一氏が指摘した(8)ように、戯曲第一幕は、三人の船員のそれぞ

れと対比されるかたちで、船長の姿が浮かびあがるような構造になっているが、おそらく、船長が他の三人と最も異なっているのは、現実に対する姿勢においてであろう。

五助　うんだら、誰が一番先に死ぬだ。（一同沈黙）　おめえら、黙ってるだな。喋らなくても、わかってるだ。おらが一番先になるだ。

西川と八蔵　（叫ぶ五助から顔をそむける）

船長　（ひとり五助を正視する）

ここでの、船長と他の三人との態度の違いは、決定的であると言ってよい。状況からみて、五助が死ぬのは時間の問題であるが、〈おら死にたくねえ〉と叫ぶ五助自身はもちろんのこと、五助の顔を正視できない八蔵と西川も、その現実を受け入れる用意はできていない。そもそも、第一幕冒頭のやりとりでわかるように、この三人は、自分たちの置かれた状況そのものを受けとめかねているのである。それに対して、五助の顔を正視できる船長は、五助の死を受け入れる用意ができている。つまり、船長は、自己の置かれた状況を、冷静に受けとめているのである。

船長と他の三人との人肉食に対する態度の違いは、このような、両者の現実に対する姿勢の違いに由来している。西川は、自分の意志で行った人肉食を、ついに受け入れることができなかった。また、人肉食へ傾く八蔵をひきとめた、彼と五助との約束は、〈喰われたくねえ〉という五助の言葉を正視しようとしなかったために、思わず彼の口からもれてしまったものである。つまり、現実を正視できなかった八蔵と西川は、ついに人肉食をも正視できなかったのである。

一方、船長にとっては、人肉食は、受け入れるべき現実の一つでしかなかったと考えられる。洞窟のなかで待ちうけているのが、寒さと飢えの果ての死でしかないという現実を受け入れたとき、同時に船長は、生きのびるためには仲間の肉を喰うしかないという現実も受け入れたのである。だからこそ船長は、終始一貫して平静さを保っていられたのである。

ただし、それは、船長が自己の行為について全く無反省であったということではない。そのことは、次のような台詞からもわかる。

船長　俺だって、せつねえよ。身体も心もせつねえよ。おめえとかわりねえわさ。

西川　おめえは、心はせつなくねえだべ。

船長　せつねえともさ。ただ俺の心はな、せつねえだけで、迷うこたねえだ。俺は、俺がしようと考えたことを、しるようにしてるだ。うんだから、迷ったり気に病んだりはしねえ。クヨクヨするぐれえなら、はじまりからしねえがいいだ。

〈せつねえ〉というからには、船長の内面で何らかの感情が動いていることは確かであろう。しかも、〈身体も心も〉という言葉からは、その感情が、船長の存在の相当に深いところと結びついているものであることがわかる。

具体的に何が〈せつねえ〉のかは語られていないから、その内実を

詮索するのは無意味であるかもしれないが、あえて、言葉を与えるならば、それは、不条理の感情とでも呼ぶべきものであろう。船団の中で自分の船だけが難破したことをはじめとする、自己に関わるあらゆる現実が、不条理としか言いようのないものであることに対して、船長は〈せつねえ〉ともらしたのではないだろうか。

いずれにせよ、船長が〈せつねえ〉という感情を抱いていたことは、間違いない。そして、その感情が、現実を冷静に受け入れるという船長の態度と相反する性質のものであることもまた、確かである。いわば、行為レベルの自己と感情レベルの自己とに、船長は分裂しているのであるが、だとすれば、船長がその分裂にどのように対処したかが、問われなければなるまい。〈せつねえだけで迷うこたねえ〉というからには、自己の感情を抑制するという意味での自己抑制があったに違いないのである。

おそらくは、この自己抑制こそが、しばしば問題にされる〈我慢する〉ということなのだろう。〈せつねえ〉という感情に身をまかせて、現実を受け入れることを拒めば、待ちうけているのは死か狂気でしかない以上、生きのびることを選択した船長は、〈我慢〉することによって、〈せつねえ〉と感じる自己を抑制する他なかったのである。つまり、〈我慢〉とは、自己の分裂から逃避するのではなく、かといって分裂を超克するものでもなく、分裂した自己をそのままに受け入れるということなのである。

このように、船長は、単なる行為者ではなく、〈我慢〉し、自己を抑制することによって主体的に現実を受け入れた人物として描かれている。その船長を通して見るとき、マッカウス洞窟での事件は、はじめて、その真の姿を明らかにするのである。

船長　俺あ鬼じゃねえぞ。誰が好きこのんで、人の肉さ喰うだか。おら、事実を言ってるだけのこんだ。な、五助が死んでくれなんだら、俺もおめえも、今日あたり死ぬとこなんだぞ。ええか。誰も五助に、死んでくれと頼んだおぼえはねえぞ。五助は死んだだ。そんで俺とおめえは、その肉を喰っただ。どう転んだって、それだけの話よ。八蔵の肉さ喰うか喰わねえか、死にもしねえうちから、騒ぐこたなかろ。おら何も、言いわけはしねえだ。八蔵が死ねば、おらたぶん、その肉を喰うべえよ。西川、おめえもたぶん喰うべえよ。

〈我慢する〉、すなわち自己を抑制するということは、現実に対するときに、自己の感情をできるだけ介入させないということである。また、現実に対する倫理的な判断も、排除されなければならない。

そのような目で見るとき、マッカウス洞窟で起ったことは、〈どう転んだって、それだけの話〉でしかなくなってしまう。なぜなら、人肉食が罪であるとか、非人間的であるというのは、人間の倫理的な判断の産物にすぎないからであり、〈事実〉は、あくまでも〈五助は死んだだ。そんで俺とおめえは、その肉を喰っただ〉という、それだけのことなのである。もし、絶対者としての神を信じれば、もちろん、ことは〈それだけの話〉ではすむまい。しかし、「ひかりごけ」の世界には神は登場せず、したがって、絶対的な倫理は存在しない。その結果、人肉食は、罪ですらなくなるのである。

もっとも、このような船長の言葉は、自己の行為を正当化するための詭弁ととれなくもない。第一幕の船長が〈読者が想像しうるかぎりの悪相の男〉と指定されていることや、八蔵が〈悪いこととして、理くつくっつける人間〉と船長を評していることからみて、それは十分に考えられることである。しかし、次のような書きからは、やはり船長が、何らかの本質をつかんでいたらしいことがわかる。

第二幕の船長は、野性的な方言ではなく、理智的な標準語を話す。それは、第一幕の船長が「我慢すること」を、野性的にしか理解できなかったに反し、第二幕の船長は、それを理智的に感得していることを示す。

常識的に考えれば、〈野性的〉な〈理解〉とか、〈理智的〉な〈感得〉とかいうのは、いささか奇妙な用語法であるが、あえてそのような言いかたをしたところに、武田の計算が感じられる。第一幕の船長は、〈我慢すること〉を、しっかりと〈理解〉しているのであるが、それは〈理智〉のはたらきによるのではなく、どちらかといえば、本能的な、〈野性的〉な〈理解〉なのであり、一方、第二幕の船長は、〈我慢すること〉を、〈感得〉しているが、それは直感によるものではなく、〈理智的〉な判断に支えられた〈感得〉なのである。つまり、船長の認識は、他人には理解不能な単なる直観でもなければ、浅薄な観念でもない、実感を伴った洞察なのだと言うことができる。

したがって、〈それだけの話〉という船長の言葉は、単なる詭弁ではなく、船長が〈事実〉を〈事実〉そのものとして見る視点を獲得したことを示すものであると判断される。また、その視点が、あらゆる倫理的判断や、〈せつねえ〉という感情をはぎとった末に獲得されたものであることも確かであろう。

このように、人肉食を〈事実〉として見る船長の前では、人肉食を罪とし、〈未開野蕃〉とするあらゆる倫理的判断が、空無化されてしまう。「野火」の主人公の〈殺したが食べなかった〉という反省命題も、船長の前では、解釈の問題として相対化されてしまうのである。

ただし、その時、人肉を食べた人間の苦悩までが空無化されてしまうのでないことは、確認しておきたい。船長が〈せつねえ〉という感情を捨てきれないことでわかるように、人間は、〈事実〉だけでは生きられない。人間が、即自的な存在であると同時に、対自的な存在でもある以上、自己の行為に意味を与えるのは当然であって、そのことは「ひかりごけ」でも視野に収められていると言ってよい。「野火」の田村一等兵が〈文明人ぶっている〉として批判されたのは、彼が苦悩したからではなく、〈文明人〉の一方的な倫理的判断に支えられた、〈殺したが食べなかった〉という反省命題を保持しているからなのである。

いずれにせよ、武田が、船長を通して、人肉食とは何かをぎりぎりまで問いつめることによって、ひとまず、〈文明人〉の〈錯覚〉を空無化できる視点を築きあげたのは間違いない。とすれば、次にやってくるのは、当然船長と〈文明〉との直接的な対決になるはずである。続いて、第二幕を見てみたい。

4

第二幕は、法廷の場であることでわかるように、船長と〈文明〉とが認識レベルで対決する劇として設定されている。そのため、船長は、第一幕とは違って、〈全く悪相を失って、キリストの如き平安のうちにある〉、認識者として登場する。ただし、〈キリストの如き平安〉が、船長が救済されたことを示すわけではないことは、第二幕でも船長が〈我慢〉していることから、明白である。

このような船長に、〈文明〉を代表するかたちで対峙するのが検事である。彼は、〈文明〉の側の倫理を根拠として、船長の行為を追求する。したがって、検事の論告のなかに、法律的な議論は一度も登場せず、その論告は、すべて船長が非人間的であることを立証することにむけられている。つまり、検事は、法律をではなく、倫理を代表するものとして、法廷に立っているのである。更に言えば、検事に拍手する傍聴人も、裁判長も、弁護人も、船長を除く全ての人物が、倫理の正当性を信じているのである。

しかし、第一幕で見たように、船長は、あらゆる解釈を相対化する〈事実〉の世界へ踏みこんでしまった存在であるために、検事の論告は、何の効力も持ちえない。そればかりか、検事を含めた法廷内の誰一人として、船長の言葉を理解することさえできないのである。

船長　私は我慢しています。

―中略―

船長　（ママ）……例えば裁判を我慢しています。

（場内、騒然となる）

検事　（怒りをおさえて）　裁判されるのが不服だというのか。

船長　そうではありません。

検事　不服でないなら、何も我慢することはないじゃないか。

船長　不服ではありませんが、我慢しています。

ここで船長が言わんとしているのは、〈文明〉には自分を裁く論理がないのだから、自分にとって裁判は不条理なものではあるが、それを逃れることができない以上、〈我慢〉して、それを受け入れるのだということであろう。しかも、それはあくまでも一例であって、実は船長は、〈事実〉としての自己と、〈せつねえ〉と感じる自己との分裂が、普遍的なものであり、生きるためには〈我慢〉し続けるしかないのだという認識を語っているのである。

しかし、検事には、船長の言葉が、法廷を混乱させるための戦術としか聞こえない。そして、やっきになって船長を追求すればするほど、船長を理解できていないことを、自ら暴露してしまうのである。

このように、船長が発言するたびに、法廷は混乱し、検事が激するにしたがって、誰も船長を裁くことができないことが、明らかになっていく。それはまた、〈文明〉の論理が無力であることを暴露することでもあって、〈文明〉が虚妄にすぎないことが、読者の目に、次第に明らかにされるのである。

船長が、作品の結末でキリストにたとえられていることも、このような船長の役割と無関係ではないだろう。「ひかりごけ」の世界に神が存在しない以上、キリストは救済の象徴ではありえない。キリスト

としての船長は、日常の感覚では到底受け入れえないような真実を体現するものであり、そのため十字架にかけられた受難者なのではないだろうか。(9)

もちろん、船長は、そのような立場を自覚してはいない。船長の意識では、あくまでも〈私一人が食べただけ〉であり、〈文明〉の虚妄性を暴露しようと考えているわけではないのである。

しかし、〈私一人が食べただけ〉であることを証拠だてようとする船長の、〈よく見て下さい〉という叫びは、逆に、全ての人間が人肉を食べていることを証拠だててしまう。法廷を埋めつくす群集の誰一人として、船長の〈光の輪〉を見ることができず、自分では気付かぬままに、〈光の輪〉を首のうしろに点してしまうのである。

ここに至って、人肉食を、非人間的な罪、〈未開野蕃〉な行為と決めつける〈文明〉の論理は、完全にその根拠を奪われてしまう。〈自分はそんな行為とは無関係だ〉という〈文明人〉の安心は〈錯覚〉にすぎず、〈文明〉対〈未開野蕃〉という対立図式もまた、〈錯覚〉にすぎないのである。先にあげたアイヌの問題に即して言えば、アイヌも和人も、等しく食人を行っており、しかも、食人を罪とする論理さえ、虚妄であってみれば、誰にもアイヌを〈未開野蕃〉扱いすることはできないのである。

5

ところで、第二幕は、カミュの「異邦人」に似た構造をもっている。日常的な感覚では理解しえない男を、倫理的な立場から裁こうとする法廷という図式は、両方の作品に共通するものである。二つの作品を比較するのは、本稿の目的ではないが、特にムルソーと船長との比較は、いくつかの興味深い問題を提出してくれるように思われる。

たとえば、ムルソーも船長も、その認識の核には「虚無」があると思われるが、キリスト教との関係を抜きにしては語れないであろうカミュの「虚無」と、武田の「虚無」を比較することからは、仏教者武田の独自の位相を見通すことができるだろう。さらに、そこに「野火」をつきあわせてみれば、戦後派の中での武田の位置を考えるうえでの、興味深い手がかりが得られるに違いない。

このような問題は、ここで扱うにはいささか大きすぎるものであり、これ以上の深入りはしない。ただ、一つだけ、「ひかりごけ」が「異邦人」とも「野火」とも異なっている点として、船長が、一度は空無化された〈文明〉世界に最終的には復帰していくと考えられることを指摘しておきたい。ムルソーと田村一等兵は、処刑されるか、狂人になるかの違いはあるが、ついに社会と断絶したままで終わる点で、共通している。これに対して船長は、中学校長として復活し、社会に復帰したことが暗示されているのである。

言うまでもなく、それを暗示しているのは、第二幕冒頭での、船長が校長に〈酷似している〉（傍点ママ）という書きである。

もちろん、三十代と設定されている校長が、実際に船長であるはずはない。しかし、二人の登場人物が、同一人物としてイメージされるというのは、複式夢幻能に前例があり、校長を前ジテ、船長を後ジテと考えれば、「ひかりごけ」の発想も、さほど突飛なものとはいえないだろう。つまり、「ひかりごけ」は、ワキである旅人（私）が、前

ジテである里人（校長）から、過去の事件の話を聞き、後半で、事件の主役（船長）である後ジテの演じる劇を、半ば夢幻のごとく見るという構成になっているのである。[10]

「ひかりごけ」後半が戯曲形式をとったことの意味については、既に前田貞昭氏の考察があるが、[11]校長と船長をイメージ的に結びつけ、船長を全く別人のように変貌させることにも、その役割があったと言ってよいだろう。復活した船長を描くためには、武田自身が能を意識していたかどうかは別にして、夢幻能の構成をとる必要があったと考えられるのである。

では、具体的に、船長は、どのようなかたちで、一度は空無化された〈文明〉の支配する社会に復帰したのであろうか。

校長は背丈の高い、痩せた人、年は三十代でしょうが、やさしく恥ずかしそうな微笑をたえずたたえて、自然や人事に逆うたちではなさそうでした。黄ばんだ皮膚に不精ひげをはやし、ひょろ長い古ズボンの脚に、粗末なズック靴を穿いている。国境の漁村の田舎校長という、自己の運命と役割を、冷静に見抜いて、ジタバタする代りに、悪気のない苦笑で、いくらか喜劇的に、その役割をうけとめている。何の警戒心も反感も起させない、おだやかではあるが陰気でない人物です。乱暴なバスの運転手や、緊張し切った村の助役さんとちがい、荒々しい自然のエネルギーが、彼の肉体だけよけて通ったようです。

ここで校長は、〈国境の漁村の田舎校長〉という、平凡な生活者として描かれている。実は、校長には、漂流や登山の話に見られるように、〈目だたぬ耐久力が具わっている〉のであるが、その〈耐久力〉は、決して表面にはあらわれない。人肉食を象徴する〈光の輪〉に連なるイメージをもつひかりごけが、ひっそりと光を放っているように、校長は、〈国境の漁村〉のかたすみで、ひっそりと生きているのである。

極限的な状況を生きのびた船長が、このような平凡な生活者として復活したのは注目に値するが、それを可能にしたのは、おそらく〈我慢〉であろう。船長は、〈我慢〉することによって、マッカウス洞窟での現実も、裁判も、冷静に受け入れたが、同じように校長は、平凡な生活者たる〈自己の運命と役割〉を、受け入れたのである。

つまり、「ひかりごけ」では、〈文明〉を絶対視して、あるものを〈未開野蕃〉と決めつけるような意識は、〈錯覚〉として否定されるが、〈文明〉そのものは、それが日常生活を支えているかぎりにおいては、容認されるのである。

もっとも、そこに問題がないわけではない。船長が社会に復帰したといっても、それはあくまでも、戯曲形式を生かしたイメージの重ねあわせによって暗示されているだけであって、そこには大きな飛躍が存在するのである。具体的に言えば、船長がどのようなかたちで〈文明〉を受け入れたのかということが、全く示されていないところに、問題があるのである。〈我慢〉によって〈文明〉を受け入れたのだとしても、もしそれが、全面的に〈文明〉を容認することであったとすれば、船長の態度は、無責任な開き直りであると言うこともできる。あるいは、船長をいきなり社会復帰させた作者武田は、問題に直面するのを避けたのだという言いかたもできるかもしれない。

しかし、「ひかりごけ」に、そこまで踏み込むことを望むのは、やはり望蜀というものであろう。「ひかりごけ」以前の武田の作品のうち、特に人間の悪や罪の問題をとりあげた作品の主人公には、罪障感にとらわれ、生きていることが〈重苦しい〉（「蝮のすえ」）という暗い認識の袋小路で佇んでいるようなところがあった。それが、どのようなかたちであるにせよ、主人公を平凡な生活者として復帰させるところまで前進したというのは、評価されるべきことである。私の見通しでは、「ひかりごけ」の翌年に連載が開始された「森と湖のまつり」以降、武田は、社会と個人の関係をしばしばとりあげるようになると思われるが、そのような問題設定は、「ひかりごけ」があってはじめて可能になったと言えるかもしれない。

また、先に触れた、仏教者武田の独自の位相の問題を考えあわせれば、船長の社会復帰は、それ自体、納得できないことではない。つまり、一切を「空」と見定めながら、世界そのものを否定することはしない大乗的な立場に武田は立っており、そのために、一度は空無化された〈文明〉が、最終的には容認されたのではないかと思われるのである。

いずれにせよ、この問題は、「森と湖のまつり」などの作品や、武田の世界観との関連で論じられるべきものであり、ここで扱うにはいささか手に余るので、これについては別の機会を待って論じることとして、とりあえずは、「ひかりごけ」の〈文明〉批判が、それ自体完結したものではなく、批判された〈文明〉社会と、その中で生きる人間との関係という大きな問題を提起していることを指摘するにとどめて、論を閉じたい。

〔注〕

（1）「人肉食について」（『新潮』昭48・11）

（2）この問題については、吉田熙生氏が「作品論　武田泰淳『ひかりごけ』」（『解釈と鑑賞』昭45・8）で詳細に論じている。

（3）前出

（4）この事件は、実際にあったもののようである。ちょうど武田が札幌を訪れた昭和二十八年八月、北大医学部で開かれた日本人類学会・日本民族学協会の第八回連合大会の「アイヌ問題シンポジウム」の席で、河野広道氏と平村幸雄氏との間に、人肉喰に関するやりとりがあったことが、藤本英夫氏の『知里真志保の生涯』（新潮社、昭57・7）に紹介されている。武田は、北大助教授時代の同僚であった知里真志保氏から、学会の話を聞かされ、それを作品に使ったと考えられる。したがって、〈M氏〉というのは、知里氏のことであるとも考えられる。なお、この論争の詳細については、『知里真志保の生涯』の、「人喰い論争」の項を参照されたい。

（5）（4）の問題の他、たとえば、〈私〉が作品中で典拠としてあげている「羅臼村郷土史」が実在の資料であることが、小笠原克氏の「武田泰淳論への試み」（『北方文芸』昭49・10～昭50・9）で確認されている。また、〈私〉の設定そのものも、武田自身に近いものだと言ってよいだろう。

（6）小笠原氏は、前出の評論で、〈このいわば三位一体的なもの（注：地名ラウシとM氏と船長）をモチーフとも磁場ともして「ひかりごけ」は聳立するのだ〉と、〈M氏〉をモチーフに結びつける考えを示している。

（7）大岡昇平氏は、「人肉食について」のなかで、田村一等兵が食べなかったのは、〈倫理的選択〉であると述べている。

（8）「イデアへの到達」（『武田泰淳論』審美社、昭45・12）

（9）このようなキリスト理解に前例がないわけではない。カミュは、「異邦人」論争に関する『朝日新聞』のインタビュー（「カミュ会見記」

昭27・1・15）のなかで、ムルソーとキリストの関係について、次のように述べている。

〈この作で私の言おうとしたことは、うそを言ってはいけない、自由人はまず自分に対して正直でなければならない、しかし真実の奉仕は危険な奉仕であり、時には死をとした奉仕であるということです。ムールソオの場合は、言わばキリストの場合と同じだと思います。ムールソオは市井の一官吏で、キリストのように理想も説かず奇跡も施さないが、しかし自分に正直で、そのためあえて一切の行為を説明せず、社会の名において殺害されたということにおいては同じことです〉

(10) 「ひかりごけ」と能の関係については、小笠原氏の「武田泰淳論への試み」（前出）に同様の指摘がある。ただし、氏は、〈私〉をワキ、校長をワキツレ、船長をシテにあてはめている。

(11) 『「野火」と「ひかりごけ」』（『岐阜大学教養部研究報告』昭59・1）